

琉球大学学術リポジトリ

冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 豊見山, 和行, Tomiyama, Kazuyuki メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2376

冠船貿易からみた琉球王国末期の対清外交

豊見山 和行

はじめに

本稿では、琉球国の対清貿易の形態において、旧来ならずしも十分に分析されることのなかった冠船貿易の内実を検討することにある。冠船は封舟とも呼ばれ、冊封使一行の乗る船のことである。冊封使一行は清代では通常二艘（頭号船・二号船）に分乗して福州から琉球国に赴いたが、その際、貿易品を冠船に満載していた。那覇で展開された冊封使一行と琉球（首里王府）の貿易形態を冠船貿易、あるいは評価（ハンガー）貿易と呼ぶ。

この冠船貿易に関する研究は低調ながらも、専論として喜舎場一隆氏⁽¹⁾、徐玉虎氏⁽²⁾、朱徳蘭氏⁽³⁾、兪玉儲氏⁽⁴⁾、そして近年の孫薇氏⁽⁵⁾や謝必震氏⁽⁶⁾による成果がある。喜舎場氏は、貿易品目、渡唐銀の調達方法、評価事件、冠船貿易に対する薩摩藩の態度などについて全体的に論及し、徐氏は、康熙五十八年（一七一九）時における冊封使一行が持ち込んだ貿易品の分析、朱氏は、一八三八年・一八六六年両度の冠船の人員構成と貿易品の数量的分析、兪氏は、近年整理されつつある北京第一檔案館所蔵の檔案文書を使用して、清單から免税状況や冊封に随伴する謝恩船等をも含めた冠船貿易論を展開している。謝氏は「評価方日記」（後述）を簡略に資料紹介し、中国（明清）の対外貿易史研究においてその資料の重要性を指摘している。特に孫氏は、一八三八年の冠船貿易を中心として、冠船を送り出す側の中国（福州）当局による規制の具体的あり方、那覇での冊封正副使による貿易関与等の問題点を本稿とは異なる視角から論及している。

さて、以上の研究状況において、孫氏らの研究によって明らかにされた部分も少なくないが、以下の問題点、すなわち琉球国内での準備態勢や薩摩藩・福州での事前交渉、そして、琉球那覇で展開した実際の貿易交渉（価格交渉）については、なお未解明の部分が多く残されている。そのため本稿では、右の視角を機軸として、単なる貿易活動へのアプローチではなく、冊封という琉球国にとって最大の国家儀礼に付随する交易活動がいかなる特質を帯びていたか、換言すれば、政治外交の論理がどのように貿易に作用しないし反映していたかを問題視角として分析するものである。

项目的に示すと、準備態勢としては、首里王府の冠船貿易への臨時組織（評価方）の人的組織のあり方、福州での事前交渉、薩摩藩との交渉の実際、そして、冊封使一行の持ち込む商品を買う際の具体的交渉過程について、さらに交易の開始時の問題、冊封使の評価貿易への関与のあり方、冊封使らの交易活動、船主らとの具体的交渉過程、高額品目の交渉問題、「加貳」をめぐる価格交渉、評価物の銀子換算問題を取り上げ、さらに旧来注目されることのなかった交易形態、すなわち琉球側の商品を冠船側（冊封使節一行）が買い取る際の交渉過程を取り上げる。

第一節 首里王府の準備態勢

琉球（首里王府）による冠船貿易に対する準備は、琉球国内における準備と国外での準備に大別される。国内の準備は、施設の確保と評価役人の編成、そして国内への儉約令の布達などであった。国外での準備は、薩摩藩および中国（福州）での交渉である。以下、それぞれについて具体的に検討しよう。上記の準備態勢は、分析の都合上

〈表 1 評価方の人員構成（同治 3 年）〉

役職名	人 名
奉行	浦崎親方
主取	喜友名親雲上、田里筑登之親雲上、伊集親雲上、許田筑登之親雲上、上里筑登之親雲上、亀山里之子親雲上
中取	屋嘉筑登之親雲上、玉那霸筑登之親雲上、城間筑登之親雲上、当間筑登之親雲上、儀間筑登之、久場筑登之
筆者	上間里之子親雲上、百名里之子親雲上、与儀筑登之親雲上、松茂良筑登之親雲上（興式）、松茂良筑登之親雲上（興察）、崎筑登之親雲上、村山里之子、喜友名里之子、長嶺筑登之、新崎筑登之、佐久本筑登之、山田筑登之、当間筑登之、西平筑登之、金城筑登之、大湾筑登之、久高筑登之、川平筑登之、比嘉筑登之、喜顔筑登之、国吉筑登之、仲村渠筑登之
外係	新嘉喜親雲上、宮平筑登之親雲上
手代	金城筑登之、玉城にや

（出典、「冠船＝評価方日記／大清同治 3 年より同 4 年 12 月迄」同治 3 年 3 月 21 日条より同年 4 月 3 日条。）

から区分したものにすぎない。これらの準備態勢が同時並行的に、かつ相互関連的に展開していたことは言うまでもない。琉球国内での組織編成は、首里王府評定所の冠船方の下に評価方が臨時に設置されるという機構になっていた。その他、久米村にも評価方役々が設置されていた。冠船方や久米村評価方役々の組織形態については詳らかにしないが、交易の主要な準備を担ったのは評価方である。ここでは、評価役人の編成について触れる。

尚泰冊封時の事例では、冊封の二年前（同治三年、一八六四年）に、まず内々に浦崎親方を評価奉行に任命し（同年三月二十一日条）、同様に評価主取に喜友名親雲上、田里筑登之親雲上、伊集親雲上、許田筑登之親雲上、上里筑登之親雲上、亀山里之子親雲上を任命していた（同二十四日条）。そのほか中取六名、筆者二十二名、外係二名、手代二名が内々に任命されていたのである（四月一日、同三日条）。この陣容において、中取役には中国産品に詳しい人物（唐向き巧者）が充てられるなど、中国事情に明るい人物が起用されていた。その人員構成は、表 1 の通りである。

以上の人員が評価方に任命されていたが、当初、評価方独自の施設はなく、奉行の浦崎親方宅で奉行と中取役のみによる準備が同年三月二十四日から開始され、同年四月十一日から中城御殿御供親雲上詰所へと移り、本格的に準備態勢を調べていく。翌同治四年三月に至って評価方詰所は、首里从那覇の親見世近くの宿に詰所を移している。本来なら親見世が即座に詰所となるべきであったが、当該期には親見世は貝摺奉行所と天使館当の詰所として使用されていた。そのため右の両所の業務が完了するまでは、暫定的に親見世近在の宿を詰所としていた。すなわち、同治三年三月から翌年三月までは、首里の中城御殿御供詰所、それ以後是那覇の親見世近辺の宿（移転月日は不明、後に親見世）が文書の作成や評定所の諮問に対する回答や久米村等との諸連絡の起点として機能するのである。評価方の当初の業務は、まず先例を調べることにあった。勘定座から評価方で必要とする諸帳簿を借用していることは、その表れである（同治三年三月二十五日条）。

その他、評定所の冠船方から過去四回の冠船時における評価物の総銀高の問い合わせに答えるなど（同五月六日条）、後述するようにさまざまな案件を処理していたのである。

例えば、冠船渡来の二年前の同治三年には、三司官から次のような儉約令が王府の各部署へ通達されていた（同年三月二十九日条）。その内容は、冠船の受け入れには、莫大の銀が必要となるため諸士・百姓へ出物の命令と御国元（薩摩藩）への砂糖の重ね直しや借銀について言及し、そのいづれも容易ではなく「極々御難波」である。そのため、諸所の普請・修補や仕立て物、その他関係機関の御物の出入りについては一層念を入れ、「御益筋」となるよう取り計らい、さらにたとえ先例であっても緊縮可能なものは緊縮するように、というものであった。以上に見るように王府内部での準備態勢が整えられていた。

第二節 事前の対中国交渉

1 福州対策

冠船貿易において琉球側は、冠船の渡来以前から中国（主に福州）においてもその準備に取りかかっていた。その方法は、道光十八年（一八三八）の場合を例にとると、朝貢貿易のため福州へ赴いていた渡唐役人らは、以前から親交のある「琉商人」の李禮々・鄭銓・楊陰長の三人を通訳として冊封の頭号船・二号船の船主と直接交渉に及んでいた。その内容は、評価物（交易品）ごとの利潤の厚薄を区別して搬入すれば、利益となること、ただし、琉球は小国のため銀子の用意には限度があり、万一高価な商品を持ち渡ってきても売り捌くことができず、持ち帰ることになり、そうなっては荷主の迷惑となること、というようなものであった。協議の際、中国商人等からその点の了承を取り付けていたが、琉球側は内密にさらに調査をした結果、玳瑁・沈香・犀角・丁子等の抜荷が予想されるところとして、その対策を講じていた。道光十八年における福州での事前交渉の一端は、このようなものであったが、それ以上の交渉過程は現在のところ判然としない。

ところが、福州での交渉過程を詳細に知り得るのが、同治五年（一八六六）の尚泰冊封時である。その二年前の同治三年（一八六三）八月から以下に見るように本格的に準備が調えられていた。かねて中国での事前交渉の検討を諮問されていた評価方係等は、協議した内容を次のように答申した。

第一に、近年中国では「賊乱」が多発し、かつまた渡唐の琉球人は金子を一切持ち渡らないため中国商人等の販路が狭まっていること、さらに前回の冠船時（戊冠船、一八三八年）に渡来し、評価の様子を熟知した商人等が存

在するため交易品を大量に琉球へ持ち込むことが予想される。交易品の減少策を講ずる上で、中国の事情に明るい「唐尙巧者」を係へ任命し、琉球へ渡航することが予想される中国人等と直接、交渉に及ぶこと。

第二に、中国人へ触れ廻る交渉の内容は、渡唐役人を始め五主や船方の者達からも折を見て「嘶成」りで伝えること。

第三に、交易品の中には、琉球の損益に係わる商品もあり、中取・係等が別紙（後掲）のように報告しているように、不勝手あるいは無用の商品は持ち渡らせないようにに渡唐する係役人へ命じること。

第四に、冊封使（勅使）の随行人の減少、冊封船（二艘ともに）が大型にならないようにすること、積み込み荷物の総量が以前の申年冠船（一八〇〇年、尚温の冊封時）と同様にすること、評価銀は部銀を含め四〇〇貫目で購入できるように荷高の取り締り方を講ずること。

第五に、前回の戌冠船時での交易品の受取方法でトラブルが生じたため（後述）、中国人の阿（河）口通事・掌案等で内々に現品を検分の上、公正な価格付けを要請すること。

以上の答申に別紙として、次のような「趣意」を添えていた。

唐人江申論候趣意

琉球之儀、不自由之小国、金銀一切出產無之、宝島人、日本国より求來候を買取申事候処、近来彼之国江西洋諸国之船々渡轉致交易候付、金銀求方前々之様不相達由ニ而、進貢・接貢料銀も乍漸相求候振合故、冠船料銀于今手当不行届、且昆布・海鼠・鮑等之品々も国産者僅計ニ而、多分宝島人持來候を買取申事候処、是又近來出所高直之由ニ而広不持渡、若御方等所望杯有之候ハ、何様之手筋を以相弁可申哉、旁以官人方至極及心配居候、就而者評価物及重高候而者、悉買取候儀不相叶、持戻外無之、然時者躊躇迷惑可致候間、其心

得を以仕舞方相細ミ、高代之品柄等不持渡方可然与之趣、申諭候事、

子八月

すなわち、琉球は、不自由な小国であり、金銀は一切産出しない。「宝島人」が日本国から持ち込む商品を購入していたところ、近年日本へ西洋諸国の船々が交易するようになり、金銀は以前のように調達できず、進貢・接貢料銀もようやく調えるような有り様であり、冠船料銀は現在もその準備が行き届かない。昆布・海鼠（ナマコ）・鮑等の俵物も琉球国産はわずかであり、多くは「宝島人」が搬入するものを買い取っていたところ、これも近年出所で高値となり、多くを持ち込めず、もし「御方」（唐人）等からの所望があってもその手はずが調えないことを琉球の官人は懸念している。これらのことから評価物を大量に持ち込んで買い上げられず、持ち帰る以外にない。その時点で思わぬ迷惑をかけることになるので、そのことを了承し、評価物を少なくし、高価な商品を持ち込まないようすべきであるとの趣旨を申し諭すこと。このような内容であった。

評価物の大量持ち込みと高価品の持ち込みを極力抑えようとする点では道光十八年時の方策と共通している。ただし、右の「趣意」では進貢・接貢料銀、冠船準備銀について「宝島人」を介して日本から調達していることを説明し、その調達方が近年の西洋諸国の来航で困難な状況に陥っているという点でより細かな弁解の筋立てとなっている。さらに、次のように交易品を七種類に区分した「品立書」を作成して、福州での交渉において具体的に琉球側の要望を伝える方法を採っていた。

その七種類とは、「一」琉球の利益となり搬入してもよい商品（十八品目）、「二」産物方の御用品であり、損益に関わらず搬入してよい商品（二二品目）、「三」産物方の御用品だが、高額のため琉球の損失となるため搬入を希望しない商品（一六品目）、「四」高額かつ損失のため搬入を希望しない商品（八品目）、「五」小量のためで

〈表2 唐人への申渡しの品立書〉

<p>〔一〕 琉球の利益となり搬入可の商品／以上物件係国中所用宜帯去為要(中国名)。</p> <p>西洋かせ(西洋線紗)、繰り綿(棉花)、山東紬(山東繭綢)、銅板かせ貫(桐板経緯字経)、銅板齊(桐板齊)、阿南齊(阿南齊)、海南葛(同)、白唐紙(白邊紙)、綿紙(棉袋紙)、わら唐紙(炮甲紙)、官香(同)、短香(同)、清明茶(同)、水砂糖(春水)、白砂糖(白糖)、菜種子油(茶油)、笠の類(傘)。</p>
<p>〔二〕 産物方の御用品で損益に関わらず搬入可の商品／以上物件係係医生所用雖帯去猶可也(上同)。</p> <p>大黃(同)、角先、甘草(同)、山綿来(土茯苓)、蒼朮(同)、大茴香(同)、大服皮(大腹皮)、杜仲(同)、白朮(同)、阿膠(同)、砂仁(同)、阿仙藥(児茶)、黄蘗(同)、藿香(同)、蓮莖(連翹)、使君子(同)、豬苓(同)、花紺青(洋青)、水角(兎角)、正蓮紫(胭脂)、蘇木、滑石(同)。</p>
<p>〔三〕 産物方の御用品だが高額のため搬入を希望しない商品／以上物件所用甚少不帯去甚好(上同)。</p> <p>玳瑁(同)、腹甲(玳瑁腹)、爪(玳瑁脚)、ばさ(玳瑁裾)、朱料(銀味)、紅花(同)、犀角(同)、本掛人參、山出人參、龍腦、沈香(同)、虫糸(同)、水銀(同)、象牙(同)、珊瑚(同)、木香(同)。</p>
<p>〔四〕 高額のため搬入を希望しない商品／以上物件價銀甚貴無力可不帯去為要(上同)。</p> <p>本人參(同)、条人參(同)、高麗人參(同)、厚朴(厚粉)、肉桂(同)、麝香(同)、鹿茸(同)、燕巢(燕窩)。</p>
<p>〔五〕 産物方の御注文は稀、少量のため搬入を希望しない商品／以上物件所用甚少不帯去甚好(上同)。</p> <p>石黄(同)、乳香(同)、肉豆蔻(肉豆蔻)、沒藥(同)、木瓜(同)、白姜蜜(同)、酸棗仁(同)、良姜(同)、小割肉桂(尺桂)、山藥(同)、血竭(血竭)、碗藥(同)。</p>
<p>〔六〕 禁制品で高額、搬入を希望しない商品／(上同)</p> <p>哈喇呢(同)、婢岐(婢岐)、羅紗、烏毛緞、烏毛紗、西洋布類(西洋各色布類)。</p>
<p>〔七〕 高額かつ無用品、一切搬入を拒否商品／以上物件係係無用宜不帯去為要(右同)</p> <p>玳瑁調えの道具類(玳瑁器具玩物)、沈香調えの道具類(沈香玩物)、犀角調えの道具類(犀角器皿玩物)、焼き物・金木石製の道具・人形類(金石磁奇巧人物玩物各等品)。</p>

(出典、「冠船=付評価方日記」大清同治3年より同4年12月迄)同治3年8月朔日条、「同右」同治4年閏5月16日条。)

きるだけ搬入を希望しない商品(十二品目)、「〔六〕禁制品で高額なため搬入を希望しない商品(六品目)」、「〔七〕高額でかつ無用品のため一切の搬入を拒絶する商品(四品目)」⁽¹⁰⁾、というものであった。それを示したのが表2である。

このように具体的に商品名をあげ、交渉の準備を整えていた。右の答申は、七種類の区分から五種類に手直しをさ

れたが、ほぼ以上の通りに実行されていたことは、同治四年に帰国した評価係らの報告によって知ることができる。⁽¹⁾

それによれば、評価係の真栄城筑登之親雲上、山口筑登之親雲上等は、琉球へ渡航する予定の船主や商人等十九人へ右のことを周知させていた。それらの船主や商人は、李茂泰・丁鳳書・卞品枝・丁寶書・李占魁・李占標・玉觀蘭・李利廣・鄭高榕・梁伯達・曾敏瑞・楊錦々・楊錦々・呉六々・宗景星・李利聚・全官・玉官・蕭尚貴という人々であった。

さらに同治四年に渡唐する進貢使節の面々には、次のように詳細な指示が下されていた。⁽²⁾

第一に、琉球での中国商品価格が中国人に露見しては、価格交渉で難渋するので、その件に関しては一切触れないこと。ただし、以前から知られていることを尋ねられた場合は、相応の値段で支払っているが、近年宝島人への転売が困難になっており、当年夏の進貢船で持ち帰った商品も売り捌くことができず、下値になっていること。このように返答すること。

第二に、渡唐役人の内、①下級の琉球人らが中国人の名義で諸品物を評価方へ売り込むこと、②中国人の依頼で接貢船から荷物を持ち込むこと、③中国人へ「船間」（積み荷空間とその権利）を売却すること、④現銀・商品を貸与すること。これらが万一発生した場合には重大な支障となるため、勢頭・大夫・御迎大夫らは、渡唐役人の監督を十分行い、もし、右の不正が行われた場合には、帰国後すぐにその人物を報告すること。

第三に、海鳳（ナマコ）・鮑は、冊封使への御進物用と御馳走用しか準備できず、評価用の分は一切ないこと。中国人からこの両品の評価用に関する質問には、琉球国産は僅少で、多くは宝島人から購入してきたが、近年は高値になり大量の持ち込みはなく、御進物用・御馳走用以外に手当用は無いと返答すること。たとえこの件についての質問がなくても折りを見て、右のように触れまわること。

第四に、評価一件について、勅使（冊封使）へ琉球側の内意を伝えるパイプ役が必要となるため、人体の確かな者を勅使の「従者内」に加える工作を行うこと。

第五に、冊封船（頭号・二号船）の荷高の総量、商品の価格等を詳しく調べて帰国後即座に報告すること。

第六に、古銀の換算において、前回の冠船時には様々なトラブルが生じたため、福州の商店において古銀一貫目に番銭百何枚、十分銀何百目での換算となっているかを詳しく調査し、その証拠書を受け取ってくる、等々であった。

〈表3 福州での相場〉

種 類		100斤に付き	
干 昆	藻 布	代銭	5、000貫文
		代銭	1、100貫文
海 鼠	炮	代銭	120、000貫文
		代銭	9、000貫文
南 府 海 鼠		代銭	6、000貫文

（出典、「冠船ニ付評価方日記 大清同治3年より同4年12月迄」同治11年9月23日条。）

右の事前交渉は、福州の中国人を対象とした項目と渡唐役人への取締り規定に大別される。中国現地での商品の調査や琉球側の内情の説明とともに、さらに注意を引くのが渡唐役人の中に中国人から依頼を受けることや「船間」を提供することを想定した禁止項目が存在する点である。

さて、福州での商品価格の調査は、評価貿易において冊封使一行の提示する価格と調整する上で不可欠であった。そのため、冊封使来琉以前から具体的な調査が行われていた。その一例は、同治三年の渡唐役者から福州での海産物の価格を次のように報告している点からも知ることができる。それを示したのが表3である。

琉球での冠船貿易において中国側への支払い⁽¹³⁾は基本的に銀であったが、当該期の一九世紀半ばにはその他に番銭（洋銀Ⅱスペインドル）による支払いも行われていた。そのため福州における番銭と古銀の換算率を把握しておくことは重要で

＜表4 銀子と番銭の換算＞

1	票番銭 120枚 105枚	番銭 114枚2分8厘5毛7糸1忽 100枚	銀子1貫目に割り番銭1枚に付き 8匁7分5厘 10匁
	(註) 同治2年(1863年)時、福州での銀子1貫目の相場		
2	110枚	104枚7分6厘1毛9糸	9匁5分4厘5毛4糸5忽
	(註) 戊冠船(1838年)時、評価品代の銀子1貫目の引合高		

(出典、「冠船ニ付評価方日記 大清同治3年より同4年12月迄」同治4年2月21日条)

あった。そのことは、番銭一枚が古銀何匁に相当するか、という首里王府評定所の諮問に、評価主取の上里筑登之親雲上による以下の回答に示されている。⁽¹⁴⁾

それによると、福州での古銀と番銭の換算率は一定していないものの、およそ番銭一枚に付き銀子八匁七、八分ほどである。ただし、以前の戊冠船時(一八三八年)には評価品を票番銭で代付けを行ったため銀子との換算でトラブルが生じ、最終的には銀子一貫目に票番銭を一〇五枚と一一〇枚の二本立てで行い、福州相場より大幅な下値となった。そのため確定した換算率を報告しえないが、とりあえず「別紙算面書」を提出していた。それを示したのが表4である。

以上に見るように商品価格の調査や番銭・銀子の換算率の調査がなされていた。さらに物品の調査と並んで重視されたのは、琉球側の意向を冊封使一行へ伝える中国人協力者を確保することであった。先に若干触れたが、ここで、やや詳しく検討してみよう。同治四年、渡唐役を命ぜられた評価中取の玉那期筑登之親雲上、当間筑登之親雲上は次の指示を評価奉行等から受けていた。

以前の申冠船(一八〇〇年)において、標官という中国人の協力者を得ることができた。仕度料を欠く標官父子に対して、渡唐役人の漢名親雲上は「自分銀」を貸し渡して援助し、冊封正使の従者の一員に加えて渡琉させていた。そのことが効を奏し、評価品額の割り増し問題やその他、困難な紛議はこの標官を通じて冊封使へ内意を伝え、琉球側の「御為筋」になったという。また、辰冠船(一八〇八年)の際にも大唐船脇筆者の仲里筑登之親雲上

は、林氏、丁氏を協力者とした。福州で冊封使へ直接、評価物の減少方の内願を行ったこと、あるいは琉球での交易において一〇〇貫目程の評価物を買上げられず苦境に陥った際、この両者の「極密取計」の働きによって高価な評価物は全て返却し、三、四割りに及ぶはずの部銀も奔走して二割りに抑え、一〇〇貫目相当の評価物をおよそ半分に減らすことができた。そのため、今回も標官父子や林氏、丁氏のような人物を確保するように、という内容の指示であった。⁽¹⁵⁾

以上が福州対策の準備概況である。このように中国での事前調査や渡唐役人による根回しだけでなく、さらに別の方法も採られていた。

2 接封大夫真荣里親方の福州外交

冊封使を福州で出迎え、琉球までの案内役を勤める役目として「接封大夫」役（Ⅱ「勅使御迎大夫」）があった。管見の限り、この役は康熙三十二年（一六八三）の冊封使迎接にまで遡ることができ、清代では一種の慣例になっていたように考えられる。主たる任務が冊封使（Ⅱ勅使）の迎接にあったことは当然であるが、それだけでなく結論を先取りして言うと、冠船受け入れに関する福州での最終責任および交渉役を担っていた。

尚泰冊封時における接封大夫役は、真荣里親雲上（後に親方、唐名は鄭秉衡）である。以下、真荣里の残した「勅使御迎大夫真荣里親方日記」⁽¹⁷⁾から福州での交渉状況を具体的にみてみよう（以下、注記しない限り右「日記」による）。

同治四年（一八六五）二月一三日、同役に任命された真荣里は、同年六月二六日に、冠船御用意方から二七通に及ぶ「書付」を手交された。二七通の内、十一通は接封大夫（真荣里）宛、残り十六通は接封大夫と渡唐役者中宛

になっている（別紙も含む）。それには、福州での交渉内容や諸準備等が詳細に記されており、首里王府が接封大夫に期待していた役割を知ることができる。

冠船御用意方の指示は、大きく福州から那覇港へ帰港する際のものとは福州での直接交渉や留意事項に分かれる。前者の例では、帰路に際して久米島等での停泊や冊封使の接遇方法（第六文書）、那覇を目指す冠船が奄美諸島へ着岸した際の対応策（第七・八・九文書）等が示されている。

後者の福州での交渉方法・留意事項に関する指示は、具体的に列挙すると次のようなものであった。

第一文書では、勅使の乗船する冊封船（封舟、冠船）が大型にならないよう留意すること、琉球の渡唐船（進貢船）規模の船を選定するように中国側へ働きかけることを指示している。那覇港が浅くなっているため大型船の入港が危険であることを表向きの理由としているが、実際には大型船での来航は評価貿易品の大量積載に連動するため、それを回避するための方策である。（接封大夫宛）

第二文書は、布政使司から支給される前行牌を早めに入手して帰国するように、との指示である。儀礼用の準備のためである。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第三文書は、渡唐中の琉球役人が、中国商人への交易決算でトラブルを起こさないようにとの布達である。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第四文書は、渡唐中の琉球役人が中国で手広く交易を行っては来年来航する中国人達の持ち込む評価物（交易品）が大量になるので、可能な限り個人交易を縮小するように、との指示である。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第五文書は、冊封船が渡琉する日程を来年の「芒種」後すぐに出帆して、同年の九月には福州へ帰帆できるように手配すること。福州からの出帆が遅れることは、琉球滞在が長引くことを意味し、そのことを懸念したものであ

る。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第一一文書は、閩江上流に位置する水口で勅使を出迎えること、その際、冠船の船主らが貿易品（評価物）を大量に持ち込まないように勅使の機嫌を見計らって要請すること、さらに辰冠船（一八〇八年）時の冊封使録である「統琉球国志略」中の「志餘之篇」に、乗員の減少、交易品も千百石を超過しないようにすることなどが記載されているため、右の書物を持参し、勅使との対面時に機嫌を見計らって呈示すること、とある。冊封使との直接交渉方法の指示である。（接封大夫宛）

第二二文書は、福州において冊封使が進物を不要とする場合も想定されるが、受納の際には乾隆二十一年（一七五六）の通りに準備すること。（接封大夫宛）

第三三文書は、前文書の別紙、すなわち進物の具体的物品・数量などを記載したものである。

第四四文書は、以前の冠船の渡来への折り、先皇帝・先皇后の月忌みに当たった場合、天使館での路地楽演奏を中止すべきどうかを福州で事前に調査することの指示である。さらに、「儀注」の文字が前代の咸豊皇帝の名と同音のため、その使用の可否をも調査することなどが指示されている。（接封大夫宛）

第五五文書は、冠船の那覇入港時における儀注（儀礼）に関して、勅使から福州で儀注書を受け取り、先例に引き当てて異なる部分は習い受けるように、との指示である。（接封大夫宛）

第六六文書は、①冠船渡来時の中国人乗船員と評価物の減少の要請を福州総督・撫院へ行うこと。②琉球滞在時に冊封使一行へ支給する食料の全粟給・半粟給・口月糧の区別について勅使へ申請すること。③節（儀礼用の道具）以外に勅使が持ち込む道具があればそれへの対応も行うこと。④勅使や遊撃用の乗船を意図的に古船を使用し、琉球で修補することになっては不都合なため、可能な限り新造船で渡航するように働きかけること。（接封大夫、渡

唐役者中宛

第一七文書は、①冊封使一行が総勢四百人を超えないように働きかけること。②正規の使者以外に、測量官や副将・参将・彈圧官などの高官が随伴してきた場合、前もって連絡すること。③評価物は部銀を含めて四百貫を超えないように働きかけること。④評価物でも高額品・無益品の買い取りは困難なので、別冊の区分のように働きかけること（第十八文書）。⑤冊封使の出身地・姓名・官位などは薩摩藩へ報告するので便宜次第、早めに知らせること。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第一八文書は、前文書④で簡単に言及されているものの中身である。琉球へ持ち込んでもよい品（阿膠・砂仁など十三品）、琉球の当用品に付き持ち込んでもよい品（石黄・乳香・肉豆蔻など二十九品）、なるべく搬入してはしくない品（大黃・甘草・土茯苓など八品）、高価品に付き搬入を拒否する品（玳瑁・紅花・犀角など二十九品）、無用品に付き一切の搬入を拒否する品（玳瑁器具玩物・沈香玩物・犀角器皿玩物・金木石磁奇巧人物玩物各等器）。このようなランク分けは前掲、表2とはほぼ同様であり、冠船貿易をスムーズに処理しようと図っていた点で共通する。

第一九文書は、琉球側のパイプ役として協力しえるような中国人を冊封使一行の中に加えることの指示である。

（接封大夫、渡唐役者中宛）

第二〇文書は、渡唐中の琉球役人が中国で借銀をしないようにすること、さらに借銀しているものは今回の渡唐で完済し、借用状を取り返すこと、などの指示である。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第二一文書は、①冠船貿易時に唐人（中国人）が琉球で購入する海鼠・鮑の件については、接待用のみしかないことを伝え、海鼠・鮑をあてにして評価物を大量に持ち込まないように働きかけること。②評価貿易用の昆布と蕃

銭との比価について、特に昆布の地代（元値）が高値になっていることを中国人らへ前もって知らせておくこと。

③琉球では唐品が高価であることを中国では一切話題にしてはならないこと。④今回渡唐する琉球役人の中には中国人の名義で自己の商品を評価物の中に紛れ込ませたり、あるいは帰帆時の接貢船における船間（積載スペース）の権利を中国人へ売却したり、あるいは唐人へ銀子や商品を渡し那覇で返済の企てを図る人物も予想されるため、それらの行為がないように各頭が監督すべきこと、などの指示である。（接封大夫、渡唐役者中宛）

第二文書は、評価物減少の要請であるが、去年の秋に中国商人から評価物減少の「挽書」を受け取っているが、そのことは商人の慣習として信用が置けないため、今年も評価中取役人の玉那覇・当間を渡唐させ、さらに委細を別紙（第二三文書）で指示したものである。（接封大夫、渡唐役者中宛）

その第三三文書とは、実際に中国人と交渉する際の想定問答を「唐人江應答之心得」としてまとめたものである。①評価物を大量に持ち込むと琉球側では全部を買い上げることができず、持ち帰る結果となること。②前回の冊封から年数が経ち、琉球側には経済的余裕が生じている筈であり、前条の回答を了解しえないと詰問してきた場合、近時における異国船の頻繁な来航や異国人の逗留、さらに災害の頻発で国中が困窮していると回答すること、としている。③右のような困窮状況で冊封使の迎接はかえって琉球の負担になるのではないかとこの質問には、冊封の儀式が無比の「大典」であり、冊封使の渡来による王爵授与は皇帝の徳化を蒙ることとなり、ひいては琉球の国運が良い方向へ向かい豊饒の世となる、という答を準備していた。

第二四文書は、阿口通事の謝衛・馮爺、阿口通事筆者の王乗謙らの三人（中国人）は琉球側にとって重要なパイプ役となるため、冊封使一行に加えて琉球へ渡海させるよう交渉すること。（接封大夫宛）

第二五文書は、冊封使の那覇滞在中、傾城（遊女）との問題が発生しないように、冊封使に対して別紙（第二六

文書)の趣旨を伝えるように働きかけること。(接封大夫宛)

第二六文書の内容は、次の通りである。異国人に対して琉球には表向き傾城は存在しないことになっているため、冊封使の那覇滞在中、傾城との交際が異国人に露見しては問題となる。そのため、現在、傾城は近年逗留する異国人を恐れて四散したこと、また飢饉のため傾城と交際するものは存在しないこと、右のことから傾城は現在では居合わせないと福州では吹聴すること。万が一にも「実形」に傾城の存在を話題としてはならない、との箱口令を敷いていた。(接封大夫、渡唐役者中宛)

以上、右の「書付」から冊封使・福州当局・福州商人等との折衝業務だけでなく、王府は真栄里へ渡海中の琉球役人に対する監督・統制をも指示していたことが分かる。

さて、福州において真栄里が直面した主要な問題は三つあった。第一は冊封使の乗船する冠船の選定問題、第二は冊封使への直接要請の一件、第三は冊封使が福州総督の所持する火輪船によって琉球へ渡航することを主張してきた問題である。

第一の冠船の選定問題は、以下のような経緯であった。当該期には民間商船を雇上げて冠船に充てていたため、大型船を避け積載する評価貿易品の量を少なくすることが真栄里らの主要任務であったことは前述した通りである。その交渉過程は次のように行われた。まず、一二月七日に、冠船選定時の検分に参加を申請している。真栄里らはすでに目星を付けた船の選定を済ませていたのである。ところが、翌同治五年一月十六日に、冠船選定は海防官が調査の上で決定する、との情報に驚いた真栄里らは、急きよ彼らが希望する福王玉船・金振茂船の検分を要請した。同月二八日に、海防官から呼び出されたところ、琉球側の希望する二艘は除外され、新據豊船・邱大順船などの六艘が候補に挙げられていた。邱大順船について琉球側の意見を求められると、調査済みのことは伏せて、邱大順は

「不達者」であり、かつ同船は建造が古すぎて冊封使への乗船要請は困難として、不同意を表明した。その結果、琉球側が希望する前述の二艘の検分要請も取り上げられた。翌二九日に、海防官が候補に挙げた六艘を真栄里らも検分に出向いた。琉球水主に「すいみ」（潜水）させ船底を突見した上で、新徳船だけが新造船であるが、船の構造に問題があること、他の五艘は「古作事」であることを海防官へ返答した。再度、二月一日に真栄里らは船着き場で海防官と船の選定を行った。その際、真栄里は海防官候補の船舶の難点を挙げ、琉球側の推す金振茂船へと誘導した結果、海防官の了解を得ることができた。他の一艘も琉球側の推す福宝玉船に決定（三月四日条）されたため、最終的には琉球側の要請通りとなった。以上が冠船選定の経緯である。

第二の福州での冊封使迎接時の要請一件は、次のような展開であった。三月二七日に伴送官や巡捕官・布政司掌案らとともに真栄里らは四艘で洪山橋を出発し、水口に到着して同地の公館で冊封使の到着を待ち、四月六日に到着した冊封使に最初の御機嫌伺いを行い、福州城の公館で再度の拝謁を要望して琉球館へ戻っている。この行動は、評価物と冠船乗組人員の減少、琉球において借銀返済方の禁止を要請するための伏線であった。しかし、同二八日に福州城公館での拝謁は拒否され、再度五月三日にも拝謁を要請したが逢うことはできなかったため、要望書のみを提出した。遊撃・都司・彈圧官らへの拝謁は実現したため、右の要請と傾城一件を含めて要望している。真栄里は冊封使との直接対面による琉球側の要請を果たすことはできなかった。

第三の火輪船（蒸気船）によって琉球渡航を主張してきた問題は次のようなものであった。五月一四日、冠船二艘の内、頭号船が出発の際、浅瀬へ乗り上げるといふ事故が発生した。そのため冊封使は、福州総督が所持する火輪船による渡海を真栄里らに打診してきた。驚愕した真栄里は、先例通り唐船での渡海を返答し、海防官へも同様に回答した上で、その取りなし方を依頼していた（五月一七日条）。翌一八日、冊封使から呼びつけられた真栄里

は、腰腰火輪船による渡海が琉球側にとって不都合との趣旨を述べ、火輪船渡航の中止を懇請したところ、「欽差（冊封使）の命は皇帝同前」として、これ以上拒否すれば、琉球渡海を白紙に戻すと恫喝される始末であった。困惑した真栄里は、海防官へ善後策を求めたところ、福州当局は琉球側へ配慮し旧来通りの渡航となった。すなわち、火輪船での琉球渡海は撤回され、福州当局の取り計らいで邱大順船に決定されたのである（五月二三日条）。冊封使の要求を福州当局が拒否した理由は不明であるが、六月五日に林浦を出帆した冠船は、六月二一日に無事那覇港へ到着した。

接封大夫・真栄里の折衝内容は、以上の通りである。これらのことから接封大夫役は、冠船迎接において極めて実務的な外交を展開していたことが明白になったと言えよう。

第三節 薩摩藩との交渉

1 貿易品の準備状況

薩摩藩支配下にあった近世の琉球は、冠船貿易においても薩藩支配の影響を免れることはできなかった。すなわち、評価交易の際に冊封使一行に支払う銀、そして大量の俵物（海産物）を大きく薩藩に依存していたからである。そのため冠船来航時の対薩摩交渉は、銀と俵物の確保が主要な案件となっていた。俵物について付言すると、冊封使一行は琉球へ持ち込んだ商品（「唐人持渡品」）を売却していただけでなく、始期は不明だが琉球で昆布・海鼠・鮑などの俵物を大量に買い付けて帰国していた。このような交易形態の始期は確定しえないが、少なくとも道光一八年（一八三八）の戊冠船以降には琉球での俵物交易が確認できる。ちなみにその戊冠船の際に交易された昆布は三

六万九〇〇〇斤余、海鼠は一万四〇〇〇斤余であつた。⁽¹⁸⁾

同治五年（一八六六）の尚泰冊封（寅冠船）について右の点を検討すると、薩藩からの借銀（拝借銀）は八〇〇〇貫目であつた。その内、三〇〇貫目を現銀、残り五〇〇貫目を金子で受け取ることが同治三年四月には確定してゐた。⁽¹⁹⁾

俵物の準備は、以下のような交渉を経て調達された。当初、問題となつたのは当時薩藩における昆布・海鼠・鮑等が高値となつてゐたため、その代替品が検討されてゐた。その際、準備目標とする数量は、昆布四八万五〇〇〇斤程、海鼠五万斤程、鮑一万斤程であつた。⁽¹⁹⁾ その諮問を受けた評価方は、代替品として、琉球産の縮緬イリコ（煎海鼠）・シチイリコ・オシヤイリコ・カチマルイリコ・メイハイリコ・刺参・ヘリ（鱈の鱈）・干鮑・干ぬり（干海苔）・干屋久カイ（干夜光貝）を揚げてゐた。その理由は、これらの品々を毎年、福州へ「多斤」持ち渡つてゐるからとしてゐる。ただし、干鮑・干ぬり・干屋久カイは例年少量しか持ち渡らないため、去年（同治二年）の接貢船・護送船では試みに大量に持ち渡つており、その売りさばき状況については、右の船が帰国してから報告するとしてゐた。⁽²¹⁾ この結果は不明だが、琉球産のイリコ類が毎年福州で交易されてゐる、という点は貴重な内容である。薩摩藩との交渉結果は、同治四年三月二六日に鹿児島から那覇へ入港した大和船によつて伝えられた。その内容は以下に示すように鹿児島琉球館からの返答である。⁽²²⁾

第一に、昆布の件について、申請通り四〇万斤が許可されたこと。

第二に、海鼠・鮑については、購入方が困難なため現在、両品で一万斤程を確保したこと。ただし、右の数量では冊封使への御進物・御馳走用分にしかないこと。

第三に、干藻については、一万斤を許可されたこと。

第四に、昆布については余分の申請を許可されたこと。

第五に、右の品以外に和産の「へり」（饅頭）一万斤を今年の正月に申請したが、その件は未だ何の返答もないこと。等々であった。

この返答をもとに評定所では、右の申請額での適否、あるいは昆布の加増申請の可否を評価方役人等に諮問していた。それに対して、評価方では主取・中取・係中による協議を行い、次のように答申している。昆布は目下、中

国では不景気のため大量購入は予想できないため申請額のままとし、「へり」をさらに一万斤増加して申請すべきことを「別紙」を添えて返答していた。右の「別紙」覚をまとめたのが表5である。

2 大和船対策

これら評価貿易品調達と同時に諸書で説かれているように、那覇に常駐していた在番奉行等は、冊封使との遭遇・接触を避けるために那覇のやや北側に位置する浦添間切城間村へ一時的に退去し、あるいは和文で記された高札や大和人（鹿児島人）の墓碑等が撤去され、市中に流通する京銭が鳩目銭に引き替えられるなど、総じて薩摩藩（日本）と関わりを示すような事物が冊封使一行の目から注意深く遠ざけられていた。⁽²³⁾

それだけではなく、那覇港に近接する薩摩藩の昆布保管家屋をカムフラージュする対策、さらに琉球・薩摩間を往来する大和船（薩摩船）対策も取られていた。ここでは、後者の大和船対策について検討してみたい。首里王府は同治五年（一八六六）一月七日付で次の案件を在番奉行へ打診していた。⁽²⁴⁾

<表5 俵物の申請内訳>

品 名	数 量	減少率	減少分	実質数量
昆 布	40万斤	100斤に付き8斤	3万2000斤	36万8000斤
干 藻	1万斤	100斤に付き9斤	900斤	9100斤
和へり	1万斤	100斤に付き10斤	1000斤	9000斤
(備考)				合計38万6100斤

(出典、「冠船ニ付評価方日記 大清同治3年より同4年12月迄」同治4年3月28日条)

一封王使渡來之節、於那霸御国船江御米積入差登候、而者難題ニ相成候付、冠船之節、御在番奉行御相談ヲ以、中頭・島尻方出来米者牧湊江陸地持越、彼方ヨリ馬艦船ヲ以運天・勘手納江積廻、御国船江積入為差登事御座候、當時御米之内砂糖繰替上納被仰付置、尤右焼出方茂正月申相仕舞候様、分而申付置候付、上納砂糖之儀者那霸ニ而積入、其余之御米運賃等ハ此節茂右仕向適被仰渡度奉存候、

一冠船之儀、芒種之節入三日ヨリ後者順風次第唐被致出帆答候故、御国船之儀、四月初頃那霸港相廻不申候而ハ差障候付、古米立船三月中積荷仕舞、新米立船共四月初旬運天江相廻、彼所ニ而順風見合致出帆候様被仰渡度奉存候、

一兩先島行御国船之儀、早々乗渡彼地ニ而積売早相仕舞、四月初頃可致歸着候、自然何歟差支、四月初旬相過致飯帆候ハ、那霸湊乗廻、直ニ運天江乗入候様被仰渡候、且又飯帆之砌依風並久米島・慶良間島ニ而冠船一所ニ致汐掛候茂難計、心遣之儀御座候間、万一難廻右様汐掛ニ而唐人ヨリ相尋申儀茂候ハ、宝島船日本江商売渡海之砌逢逆風、此所江致漂着候筋相答候様、此又被仰渡度奉存候、

一当春下船之儀、四月ニ相掛罷下候船々者直ニ運天江乗入候様被仰渡候旨、御国元江申上置候得共、自然那霸江乗参候船茂可有之哉、帆船相見得候ハ、早速漕出、運天江乗入候様可相違旨、伊平屋島・伊江島・今飯（帰）仁間切・本部間切在番人江可申渡置候間、御在番奉行所御書付被下度奉存候、

一右島々在番人ヨリ不相違走参申儀茂候ハ、読谷山ヨリ早々漕出、久米島・慶良間島之内江乗入候様可相違旨、在番人江可申渡置候間、自然右兩島之内江冠船一所ニ致汐掛、唐人ヨリ相尋申儀茂候ハ、前条同斷相達候様、船頭共江申渡置候間、是又御書付被下度奉存候、

すなわち、第一条は、①島尻方・中頭方の年貢米は陸路でひとまず牧港へ運び、そこから馬艦船で運天港あるい

は勘手納港へと転送し、待機する大和船に積み替えて鹿児島へ運ぶという方法である。ところが、②年貢米の内、一部を砂糖で代納するため、砂糖の焼き出し方を冊封使渡来前の正月中に終了することを布達しており、上納砂糖は那覇港で積み込み、その他の年貢米は①による搬出方式をとること。

第二条は、①冠船の福州出立は「芒種」の三日後と予測され、大和船は四月初頃には那覇港を引き払っていなくてはならないこと。そのため具体的に、②古米立船は那覇港においては三月中に積み荷を完了し、新米立船の場合は四月初旬に運天港で積み込み同港から出帆させたいこと。

第三条は、①両先島（宮古・八重山）を往来する大和船の取り扱いでは、両先島へ火急に渡航し、積み入れや売却を早急に済ませ、四月初旬には鹿児島へ帰還させるように手配すること。ただし、②四月初旬後、両先島から帰帆する場合は、那覇港ではなく直接運天港へ直行させること。③大和船が帰帆の際、久米島や慶良間島で冠船の停泊している港に寄港する場合は、大和船であることを隠し、日本への商売の途上、逆風のため当該島（港）へ漂着した「宝島船」として装うこと。

第四条では、鹿児島から琉球へ向かう「下船」対策が採られ、①冊封使の渡来時期に近い四月に鹿児島から那覇へ向かう場合は、直接運天港へ乗り入れるように手配すること。②那覇へ乗り入れることが予想されるとして、伊平屋島・伊江島・今帰仁間切・本部間切の諸浦在番は、大和船を直ちに運天港へ向かわせること、③さらに、伊平屋・本部ラインの監視体制から漏れ、そのまま那覇へ帆走する大和船に対しては、読谷山の諸浦在番がその船へ連絡し、久米島か慶良間島のいずれかへ向かわせる手はずを整えること。④万一、久米島・慶良間島で冠船と共に停泊することになった場合、前述の「宝島船」同様の弁明を準備すること、等。

以上の案件が王府側から番奉行へ提起され、了承の上で大和船対策が採られた。薩摩（日本）との関係を押し

隠すための何重ものガードが、琉球・薩摩合意の上で張りめぐらされていたのである。

第四節 冊封使節一行による搬入商品の交渉過程

1 「評価」交渉開始時の状況

同治五年（一八六六）六月二日に来航した冊封使節団（正使趙新、副使于光甲ら）の冠船貿易の実体について、以下、主に「寅の冠船」と呼称された尚泰冊封時の「冠船ニ付評価方日記」同治三／同六年（一八六四～六七年）を用いて分析する。⁽²⁵⁾

琉球における評価貿易の形態は、大まかに見ると次のようになっていた。まず冠船の「清冊」（＝交易品リスト）を船主ら（唐人側）が提出し、そのリストに琉球側の評価役人らが価格を付け、その価格をめぐる双方が納得ないし妥協するまで何度も価格交渉がくり返し行なわれ、双方の合意の後、買い上げると言うような貿易形態であった。⁽²⁶⁾

また、琉球側は、船主らが最初に提出した「清冊」（リスト）の他に後日提出される「品立書」（リスト）の商品などを正規の評価所で処理すると支出銀が過大となることや、また後世の支障になるとの理由から前回の戊冠船時（一八三八年）と同じように協評価所を設置し、内々に買い取る方法を取っていた（以下、月日のみを記す）。⁽²⁷⁾ 以下において貿易の具体相を検討してみたい。

評価貿易の開始は「開館」と称され、冠船の入港後しばらく経った八月一日から開始された。⁽²⁷⁾ その際、頭号船・二号船船主の邱大順・金振茂らから貿易品のリスト（清冊）が琉球側の評価方（評価司）へ提出され、その点検・

調査を経て回答が八月十日になされた。しかし、琉球側が値を付けた「代付帳」に不満を示した船主・師爺ら十四人は評価館へ出向き、以下のように主張した。「船主以下唐人等者專為冊封遠海龍渡、勿論此節者積荷物太分漏席相成、及迷惑居候間旁憐愍を以、下値之品々者代上いたし代付帳ニ相直し、明日限可差出旨、兩勅使様より被御遣候」と、もっぱら冊封のために遠海を渡航してきたため多くの潮濡れや廃れ品が生じているが、憐憫を加えてもらうように、と下値品の値上げを要求してきた。それに対して評価司は、「代付帳」は「公道」（適正）であるが、冊封使（勅使）の要請でもあり十分検討するため、二日間の猶予が必要であるとして船主らをいったん帰した（八月十二日条）。

八月十四日になり、下値品を一定度値上げした帳簿を冊封使の師爺へ披見させたところ、船主らは納得しないであろうが相対で交渉するようにと指示してきた。評価館での交渉において、船主らは全商品の値上げを要求したため、評価司は「唐（＝福州）相場代ニ運賃・諸雜費差引、外二三四分宛之見上を以代付仕候間持帰得与相考、当分之代付ニ而取究候様」と福州相場に三・四割を加算した価格であると主張した。ところが、船主ら九人は「終怒立、右代付帳茂差捨罷帰候」と初回の価格交渉は決裂した（八月十四日条）。

2 冊封使の貿易関与

評価貿易全体、あるいは価格交渉においても冊封使は深く関与していた。中国側の苦情が直接冊封使から世子尚泰に咨文によって宛てられていたのである。⁽²⁸⁾ その問題は次のようなものであった。

咨文拝見仕候得者、頭・二号船船主申出ニ評価一件延引致し候上、下値押買之駄、評価方より相付候値成通ニ而者利益無之而已ならず、買元代より過分引入候、此儀屋嘉・当間・友寄・玉那覇・漢那・大城等、中小

利を計て及難渋等之由候間、評価官ニ論し飭て公道ニ値成相付候様ニ与之趣（後略）、

というものであった（八月十五日条）。摘記すると、第一に船主らの申請に対して価格交渉を延引したこと、第二に低価格で「押し買い」の有様であり、第三に評価方の値づけでは利益が無いばかりか、元値よりも低いこと、第四に評価司（評価役人）の屋嘉・当間・友寄・玉那覇・漢那・大城等による小利を求める計策に難渋していること、以上のことから評価司らに対して世子の戒告によって公正な値づけを行うよう要請してきたのである。

この苦情に対して評価方からは、適正な価格を示しているが、船主らとの相対による「公平」な処理方を回答（回答）すべしとの案が提出された。しかし、間もなく同十五日には、冊封使方の師爺を通じて、「大老爺」等が天使館へ呼び付けられたため、評価奉行の浦崎親方、評価主取の上里筑登之親雲上など七名の主立った評価役人らが天使館へ赴いた。ここでは、冊封使方の堂官らから、昨日返却した「評価代付帳」の二、三日の猶子を願ひ許容された（八月十五日条）。「品立書」の一部を示すと以下のような内容であった。

官給貨價單

一上蟲絲淨三百二十二斤 足鷹番價每斤二十元

洋参之事

一長枝大洋参面淨一百六十三斤 每斤價三十五元

一犀角面十九隻 重十九斤十二兩 每斤價六十元

水角之事

一兕面一百六十五隻 重三百十二斤八兩 每斤價三元五角

龍腦之事

一上艾片淨二百十六斤 每斤價二千四百元

一極上玳瑁二十掛 每斤價二百八十元

一上玳瑁三十五掛 重五十七斤十二兩 每斤價一百元

(後略)

以下、「安記」「一號記」「二號記」「三號記」「福記」「棧園記」「吉字號」「趙耀齋」「趙貽穀」「林竹坪」「卞騰雲」「梁弼星」ごとに貿易品名・数量・価格がまとめられ、さらに「丙寅仲秋星字號貨單」として「星記字畫單」「蔣少菴」「林蓉屏」「張福」「馮承綏」「鄭景星」「楊維安」「陳棣園」「金在鎔」「趙定乾」「馬瀚秋」「王夢松」「趙蔭堂」「王雍齋」「林朗人」「林鷺丞」「李宜庚」「陳夢麟」「余福」「鄭衣司」「施福」「吳厨子」「玉字號」「彭履享」「希記」「泰記」ごとに、同じく貿易品名および数量・価格が記されていた(八月十五日条)。

その後、冊封使からの圧力は、「昨日(八月二十一日)、問安之時、勅使(冊封使)様より冊封御日柄被仰渡、引次冠船ニ相懸候事々 茂差急、惣而無滯致弁達候様」にと「問安」(ご機嫌伺い)に訪ねてきた三司官らへ伝えていた。そのため、首里王府は那覇に詰めている浜比嘉親方へ評価一件については火急に処理するよう評価方へ通達することを命じている(八月二十二日条)。

さらに、九月一日には評価奉行らに対して冊封使は「来月五日には出帆の予定であるため、値付けの延引を行わないように」と通知した(九月一日条)。そして、九月五日には天使館東門に「告示」を掛け、三司官から評価役人らに対して「公平」な交易の指示を下すことを求める船主(唐人)らの稟文を掲げている(九月五日条)。

また、同十日にも評価奉行らを呼びつけて、冠船の頭号船・二号船の船主らの代付けにおいて「相当」の品目と

「不相当」の品目があり、「唐相場」に詳しい琉球役人によって十分吟味し、「不相当之代付者屹与代上を以早々差出」すようにと要求している（九月十日条）。

このように、冊封使からの圧力がしばしばかけられていたのである。

3 冊封使・彈圧官らの交易活動

以上のように、冊封使による評価貿易への関与ばかりでなく、彼らの交易品を直接買い上げるよう働きかけてもいた。

例えば、八月二十四日に、冊封正使から高麗人参五〇斤程を内々に買い取るようにとの要求があり、その経緯は次のようなものであった。要請を受けた評価方では、北京宰領の久高筑登之にそれらの品を検分させた上で、北京価格・福州価格とともに提出させ、他の評価物代（福州相場）に準拠し、さらに四割り増しの部銀の加算を協議していた。ところが、冊封使の使いとしてやってきた阿口通事は、他の評価物と同じ値付けに不満を抱き、これでは冊封使へ返答は困難であり、もし値上げが叶わないならば、即座に他の高官へ要請し、それでも拒否されるならば首里へ上つても要求する、と発言した。そのため、評価役人らはまず浜比嘉親方へ相談し、「御座」（＝撰政・三司官）の指示を仰ぐこととなり、結局「致代上候ハ、御取請宜、評価値組一件使ニ茂可相成、此方代付外ニ三百枚者相付」と、冊封使の心証をよくすることで、今後の値組交渉における便宜を期待して、評価方での値付けに三〇〇枚（番銭＝洋銀）の上乗せを決定した。この処理によって右の問題はひとまず落着いた。ただし、その処理方法が他の「唐人」へ知れ渡ると評価物代付けの障害となることを懸念し、阿口通事へ口止め策を講じていた（八月二十四日条）。また、九月五日には、評価奉行などを天使館へ呼び寄せ、一昨日三司官へ渡した評価品について早々に値上

げをして提出するように、と評価役人の松本親雲上へ伝える（九月五日条）など、交易活動を展開していた。

このような交易行為以外に、前記の大量の「官給貨物」そのものが冊封正副使等が持ち込んだ交易品として考えられる。⁽²⁹⁾ その交易品の価格交渉に冊封使自身が前面に出ることはなかったが、冊封使の側近的存在である師爺等を通じて指示を与えていた点は、後述する通りである。

彈圧官による交易行為は、次のようなものであった。彈圧官から九月九日に「頂上清明茶壹百五拾觔 英壹元／頂上烏龍茶貳百八拾觔 英貳元／頂上羊山茶壹拾五觔／大號黃衣針八萬九千条 每百条 英貳角」以下「高麗參半觔 每觔 英參拾九元」までの十六件を英番銭で一、三一二元六角余で買い上げるように「品立書」を作成して差し出していた（九月九日条）。

また、都司からは、九月十七日に「極内分より致繰替呉り度」として「藍縷二十疋／氷片二十斤半／犀角二斤半／鮑魚七十斤／魚翅三十斤」など八品目を提出していた。そして、この都司の要請は「極内分ニ申出ニ而、御仮屋方江者御届不申上候也」とあるように、「御仮屋方」（＝薩摩の在番奉行）へは報告されず、極秘に処理されていたのである（九月十七日条）。

遊撃からも「白夏布十疋／頂細緑茶五箱／銀珠一千餘両」等を「内々」で買い上げるようにと要求され、都司同様に在番奉行へは報告しない形での処理を行っている（九月十九日条）。

これらのことは、十月二日の交渉においても再度問題となるが、その際、冊封使・遊撃・都司等からの要請は、次に示すように興味深い問題をはらんでいた（十月二日条）。

正使様御物高麗五拾斤、其外遊撃・都司・師爺共之内より茂各自分物極内分より申頼懸り候付、評価値組早ク相片付候取計之為、一統之品より代上置候茂段々有之、勿論、遊撃・都司ニ者評価物持渡管ニ而無之候間、

極隱密ニ取計呉候様、訳而御頼茂有之候（後略）、

右によると、価格交渉を早期に解決するために特別に通常の交易品以上の値づけをしていること、さらに本来、遊撃・都司の中国官人らは評価物を持ち込まないことになっているにもかかわらず携帯してきており、そのため「極く隱密」の処理を依頼していた、ということである。

このことは、遊撃・都司らが琉球において表向き交易することを中国当局から禁止されていたことと符合する。⁽³⁰⁾そのため公然と交易することができない遊撃・都司らは、「隱密」に琉球側へ働きかけ、それに対して首里王府側も評価物の価格交渉を円滑に進めるための配慮から黙認していた。さらに、冊封使・遊撃・都司らとの交易活動を薩摩側へ露見されないための隱蔽工作も行われていた。このことは、薩摩側への交易決算書でもある「冠船付評価物買立帳」に記載されないことを意味する。換言すれば、右の「買立帳」等の表向きの帳簿類による分析だけでは、評価貿易の全体像を正確に把握することは困難と言えよう。本稿では、交易品全体の数量的分析は割愛したが、旧来の研究では右の問題点は十分に認識されていなかったため注意が必要である。

4 船主らとの交渉過程

冊封使や彈圧官らとの交渉は以上に見るように複雑かつ処理が困難であったが、船主らとの価格交渉もまた容易ではなかった。その問題を以下に検討してみよう。

八月十六日に、頭号船・二号船の船主ら五人へ評価方で値づけた「代付帳」を渡したところ、船主らは「少々宛之利潤之品^茂有之候得共、多分者買元代引足不申品段々有之候」と多少の値上げは見られるが、大部分は元値にも及ばないと不満を示した。それに対して評価方役人は、福州相場に諸雜費を引いた上で相応の銀額を上乗せして

おり、それで値決めをしてほしい、と以前の回答をくり返すと、船主らは十分検討して返答するとしたため、その日の折衝は終了した（八月十六日条）。

翌十七日、船主らは、交易用の諸反布の中に潮濡れ等の品があるため早々に検査することを要求してきた。そのため、評価中取・同係・五主役らが出向き、船主ら十名の立ち会いの下でシミ（黴）入りや疵物などを選び分けて封印する作業を翌日まで行っている（八月十七日・十八日条）。

そして、同十八日には、冊封使から値づけ状況を催促された評価方では、船主らの要求する価格と冊封使方からの価格を合算すると琉球側の準備銀を大幅に上まわるとして、その弁明策として不足分は「国中の有財者」に買い取らせるのでしばらく値づけを待つようにと返答した。それに対して師爺らは、冊封使らの商品を押し付けて、値づけは後廻しでよいが、即座に商品の検査に取りかかるよう強要したため、評価役人らは仕方なく検査を行った（八月十八日条）。

八月二十一日には、冊封使らが滞在している天使館のほど近くに位置する「親見世」へ「唐人」らの多くが詰めかけてきた。同所は冊封使一行の滞在中、評価所として交易を取り扱う臨時の施設となっていた。そのため、以前に渡していた「貨冊代付」を早々に行うように、との要請に押し付けてきていた。評価役人らは、大量の交易品を公司（Ⅱ評価方）の準備銀では不足するため明日まで待つようにと返答したが、唐人らは「以の外、怒り立ち」、今日中に手渡すようにと主張して譲らなかった。評価役人らの「買い手を差し置いて代付けをすることは困難ゆえ、是非待つように」との説得にもかかわらず承諾しないため、評価役人らは浜比嘉親方と相談の上で、夕方頃に来上がつたとして「貨冊代付」を手渡している（八月二十一日条）。

5 高額品目の交渉問題

琉球側は評価貿易において高価な商品の取引を当初から回避しようとしていた。前述のように、冊封使渡来以前から福州において水面下の事前交渉を琉球側は展開していた。

しかしながら、琉球側の働きかけはあまり効果がなく、琉球側が懸念した高額商品が評価物として琉球に持ち込まれていた。その代表的なものは、玳瑁、玳瑁爪、麝香、龍腦、肉桂などである。

首里王府の評定所は、八月二十一日、評価主取の上里筑登之親雲上を呼び寄せ、唐人らの「申立書」の中に「玳瑁」甲・同爪・麝香・龍腦・肉桂」などの高額品が見えること、また、その他無用の商品は評価方で協議して返却するようにと指示を与えている（八月二十一日条）。

また、後日、上記の商品の返却が困難なら、その点をも検討するようとの指示を受けた評価方では玳瑁などの高額商品の代銀を含めて算出した「代賦帳」を評価方の上里・亀山らが首里城へ持参して提出したところ、王府の準備銀（御手当銀）で対応方はほぼ可能として、不用品はなるべく返却させ、玳瑁・同爪・麝香・龍腦・肉桂などを取り入れる方針に傾いた（八月二十四日条）。

そのため、評価方では、さらに以下の「寛」を提出して必要量を目算で算出している（八月二十八日条）。

寛

一 肉桂、四百八拾斤二合八勺壹才、

但、禿少有之候上、氣味去り易物ニ而大分御取入相成候 而者 不用相成候間、四分壹御取入、余者 差返候様、
一 玳瑁、二百三拾六斤七合六才、

一同はさ、九拾三斤、

一同爪、八拾老斤、

但、三行禿少御弘方差支申咎候間、是又半分丈^者差返候様、

一麝香、五斤老合七勺五才、

但、禿少有之候上、位不宜品ニ候間、差返候様、

一燕子、六拾斤、

但、禿少有之候間、半方程^者差返候様、

右本行、但書之通可成程相談を以差返候様被仰付度事、

八月廿八日

評価方

すなわち、①肉桂四八〇斤余は、キズ（禿）が少し見られ、香り（気味）が失われやすい品で大量購入は宜しくないため、四分の一ほどを購入し、他は返却すること。②玳瑁二三六斤、同ばさ（玳瑁裾）九三斤、同爪八一斤は、売却が困難であるため、半分は返却すること。③麝香五斤は、キズが少しあり品質不良のため返却すること。④燕子（燕窩）六〇斤は、キズが少しあり半分は返却すること。以上を評定所へ上申したところ、「弥其通可取計」と了承され、評価方の方針で臨むことが確定した。

しかし、首里王府のこのような方針が貫徹していたかどうかは別問題である。つまり、購入の実体は必ずしも王府・評価方の方針通りには進展しなかったからである。具体的な交渉過程は現在の史料状況では不明であるが、少なくとも「冠船付評価買立帳」⁽³⁾によると、次のようになっている。すなわち、肉桂〓三〇斤余、玳瑁〓二三九、九斤余、玳瑁裾〓六〇斤余、玳瑁爪〓一〇一、六斤余、燕子（燕窩〓燕の巢）〓五五斤余ないし五七斤余を買い上げているのである。評価方の当初の思惑とは、ほど遠い結果となっていたことが分かる。

6 「加貳」(二割増し)をめぐる価格交渉

八月二十七日、首里城で冊封の儀式が挙行され、世子尚泰は晴れて国王となった。冊封儀礼を首尾よく済ませた尚泰王は、「御満悦」で関係役人らへ褒美を与える旨を布達していた(八月二十九日条)。

その一方、那覇での評価交渉は緊迫した事態となっていた。すなわち、大使館内の中国人らがこれまでの評価物代付けに強い不満を抱いていたからである。そのため、協評価所の施設とされていた西村の山口筑登之親雲上の住宅で代付帳を手渡したところ、「都ての品々不都合の代付けと申し、甚だ怒り立ち、中取玉那覇筑登之親雲上・同当間筑登之親雲上兩人、(天使)館屋内、掌案詰め所へ引き参り、馬夫ども皮鞭并に鎖など持ち来たり、威し付け、きつと代上げ致す可し」と激しい威嚇行動に出てきた。玉那覇らは公司(＝評価方)の指示に従っているため、これ以上の値上げは不可能であると反論したが、唐人らの怒りは収まらず二人を非難するだけでなく拘束しようとする挙動に出たものの、その場は阿口通事の取りなしで無事に解放されることになった(八月二十九日条)。そのため、王府側は、唐人らの怒りや圧力をこれまでの弁明で切り抜けることは困難と見て、次のような対処策を講じることになる。

その第一は冊封使らの高官に銀一〇〇貫目を上乗せして支払うことで、船主・水主らの評価物と冊封正副使等の評価物(官鎗貨物)を分断し、価格交渉を有利に進める方策であり、第二は「加貳」(価格の二割増し)策である。

第一の方策は次のように行われた。前述のように、九月一日、大使館から評価奉行・役々が呼び出され、評価物代上げを冊封使から要請された。それに対して琉球側は、「先だつての評価代付帳は唐(福州)での買本(価格)に運賃・諸雑費を付けていること、さらに四、五割の部銀をも加えていること。これ以上の値上げは、琉球の国力では不可能であり、十分に吟味してほしい」として、その場を引き上げた。しかし、冊封使は「問安」に訪れてきた与那原親方に

対して評価物の値上げ措置を採るよう要求したため、与那原は評価役人へその旨の指示を下すことを約束した。

与那原は、この膠着した価格交渉の打開策として、これまでの価格に銀一〇〇貫目を余計に支払う案を評価役人らへ検討させたところ、評価方は次のような対案を提出した。すなわち、琉球側の代付けは相応なものであり、銀一〇〇貫目の上乗せは差し控え、琉球側の価格を冊封使が了承してもらえらば、正副使らへ相応の「御礼銀」を差し上げる用意があると、内々に働きかけることであった。「御礼銀」の内容は、具体的には、正副使へそれぞれ各番銀二、〇〇〇枚づつ、左右の師爺と三々へ番銀一、〇〇〇枚づつ、合計番銀七、〇〇〇枚が提示された。しかし、王府側は結局、当初の案通り銀一〇〇貫目の上乗せによる分断策で交渉することを決定し（九月一日条）、その方針で臨んだ。しかしながら、冊封使側の拒否に逢い、その交渉はあえなく失敗した（九月三日条）。

再三にわたって、冊封使から早々の値上げ要請を受けた王府側は次の方策を講じた。それが「加弐」すなわち「価格の二割増し」である。九月十一日、評価役人らは首里城へ呼び出され、先例の「加弐」を諮問された。それに対する返答は、「現在、大使館内の唐人との評価代付けも決着しておらず、船主らへ評価物に加弐を付けることが伝わると、それに応じて値上げを要求してくることが十分予想される。まず加弐の沙汰は控えるほうがよい」と言うものであった（九月十一日条）。翌日、首里王府側は、「加弐」は船主らの評価物だけに付ける先例となっており、大使館内の唐人らへ伝わっても支障はない、として「加弐」一件と船主らへの通達をほぼ決定したが、評価方での支障の有無を協議して回答するようにと伝えた（八月十二日条）。

そのため、翌日、評価方では「加弐」の一件について、大使館内の唐人から代上げを要求されると交渉が長引くとして、阿口通事の王秉謙を呼び寄せて次のような交渉を行った。評価役人らは、一〇〇貫目の残銀で値上げをし、さらに先例の「加弐」を実施するので、価格交渉を速やかに処理するようにと持ちかけた。それに対して阿口通事

〈表6〉

琉球側の提起 (10月17日)	師爺の回答 (10月19日)
銀1貫目=票番銭128枚 現番銭1枚=票番銭1枚7厘 →票番銭1枚6厘 (10月19日)	→ 同=票番銭115枚 → 同1枚2厘

は、「加貳」を実施するなら一〇〇貫目の残銀による代上げは不用であり、万一、天使館内から不満が出たときの補填にすべきであるとして助言を与えていた。船主・水主らの評価物へ「加貳」を実施するとの決定に阿口通事は「喜悦の体」であった（九月十三日条）。

「加貳」実施の報が伝わると、予想通り天使館内の中国人らは、船主・水夫の貨物と同様に「官艚各貨物」にも「加貳」を要求してきた。しかし、評価役人ら二人は天使館に直接出向き、阿口通事へ船主・水主の荷物以外に「加貳」の先例はない、と強く主張するように通告した（九月十六日条）。その後、唐人十四、五人が押し掛けて「加貳」の措置を要求してきた際も、同様に「先例なし」として押し切っている（九月二十九日条）。

7 評価物の銀子換算問題

評価物の価格付けは「票番銭」で行っていた。そのため、古銀（紋銀）との換算率が大きな問題であった。十月十七日、評価役人らは天使館へ赴き師爺らと協議している。琉球側は「当年の三月から四月までの唐（福州）相場に基づいて、銀子一貫目に票番銭一二八枚」として、現番銭一枚に票番銭一枚七厘とすることを提示したが、「引き合い代、余りに高値」として拒否され、その日の交渉は不発に終わった（十月十七日条）。

同十九日に評価役人らは浜比嘉親方と相談し、銀子一貫目に票番銭一枚六厘とする案を再度師爺らに持ちかけた。しかし、師爺らは銀子一貫目に票番銭一一五枚、現番銭一枚に付き一枚二厘、と引き下げ案を対置したためその日の交渉も成立しなかった。表6はそれをまとめたものである。

〈表7〉

王府側の提起	中国人の回答	琉球側の再提起	交渉成立
銀1貫目=票番銭124枚 現番銭1枚=票番銭1枚4厘	→ 120枚 → 1枚3厘	→ 122枚 → 1枚4厘	→ 122枚 → 1枚4厘

冊封使から銀子の換算率を早急に解決するよう要請を受け、十月二十一日、三度目の交渉が行われた。銀子一貫目に付き票番銭一二四枚、現番銭一枚に票番銭一枚四厘、と琉球側が提示したところ、唐人側は「以ての外怒り立ち、段々利(理)不尽」ばかりを申し懸けると同意しなかった。それに対して、王府側は「右の引き合い代にても唐

換金相場より格別下値にこれ有り候間、此の上落着致さず候わば、銀子相封にて持ち渡り、唐に於いて換銀を以て決算致す可く」と強く反論した。銀子を封印し福州に持ち込み福州相場で決算してもよい、との琉球側の強行な姿勢に冊封使への指示を仰いだ師爺らは、古銀一貫目に票番銭一二〇枚、現番銭一枚に票番銭一枚三厘での換算を提起し、これ以上は僅かな値上げも認めないと返答した。評価役人らは浜比嘉親方と相談し、銀一貫目に票番銭一二二枚、現番銭一枚に票番銭一枚四厘での換算を提示したところ、当初は「怒り立ち候体」であったが、最終的には琉球側の票番銭一二二枚を了承した。ただし、番銭との換算は中国人の主張する一枚三厘が提示されたため、琉球側もそれを受け入れ、相互に「面議定」(証拠書)を作成して、銀子換算問題は解決した(十月二十一日条)。それをまとめたものが表7である。

この銀子換算交渉において、琉球側は福州相場を熟知していたため、福州へ銀子を持ち込み福州相場での換算をも辞さないとの主張が功を奏したものと言えよう。

第五節 唐人による海産物購入の交渉過程

旧来の冠船貿易論において、冊封使一行が琉球側から買い取る問題を議論したものはない。もっ

〈表8〉

9月15日の提示	9月20日の再提示
昆布100斤＝代票番銭5枚	→ 不明
干藻100斤＝同 70枚	→ 68枚
魚翅100斤＝同 62枚	→ 60枚
油魚100斤＝同 15枚	→ 14枚
石参・梅花参100斤＝同42枚	→ 40枚
長烏参100斤＝同 32枚	→ 30枚

ばら冊封使らが琉球に持ち込む交易商品にのみ分析が注がれてきた。しかし、以下に示すように琉球側からの購入問題を欠落させしめては、冠船貿易の半面を明らかにしたに過ぎないと言えよう。

冊封使一行が琉球側から購入する昆布・カンテン（干藻）等への代付け状況を要求した最初は、九月十五日である。評価方では浜比嘉親方と相談をした上で、福州相場よりも下値に付けていると返答し、次のような価格を回答したが、その価格は高値であるとして、再度相応の代付けを行うようにとの要求が九月十九日になされた。そのため、九月二十日に票番銭を約二枚引き下げる案を提起した。それを示したのが表8である。

ところが、船主からの回答がしばらく途絶えていたため、十月十二日になって価格の案件を連絡したところ、船主らは値下げを要望し、冠船の帰国までに時日の余裕がない、として荷造り料を含めて提出することを返答してきた。そのため表9のような換算率が評価方から伝えられた（十月十二日条）。ところが、翌日に船主方は、これ以上の交渉の延引を受け付けないと回答してきた、さらに帰帆間際という制約から結局、評価役人らは価格引き上げを断念、浜比嘉親方・与那原親方らの許可を得て、船主らへ売却する昆布等の価格交渉を終えている。その交渉の状況は表9の通りである（十月十三日条）。

ちなみに、長烏参は飛鳥賊、梅花は海参（煎海鼠）、へりは前述したように鱧鱈のことである。翌十四日から早速、中国人らへ引き渡す品々が御用意新御蔵から運び出され、評価所での荷造りが始まった（十月十四日条）。翌十五日に、頭号船船主へ昆布三万斤の懸け渡しを皮切りに、同十六日には頭号船船主へ干藻一万八、八四二斤、

二号船船主へ昆布三万斤を懸け渡し、「館屋内唐人」（冊封正副使等）からは昆布八、二〇〇斤程、干藻二、一〇〇斤程の購入希望があり、売却を許可している。以後、縮緬海鼠や鮑等の購入が行われ、十月二十二日までに中国人らへすべて引き渡ししている。中国人らが購入した海産物は少なくとも以下に示すような状況であった。

琉球側の提示（10月12日）	船主らの提示（10月13日）＝交渉成立
昆布100斤＝代番銭4枚5分 荷料＝4分4厘3毛 計＝4枚9分3厘3毛	→ 3枚5分（荷料含め。以下同）
干藻100斤＝同60枚 荷料＝1枚4分1厘 計＝61枚4分1厘	→ 52枚
斑へり100斤＝同60枚 荷料＝6分 計＝60枚6分	→ 52枚
和へり100斤＝同50枚 荷料＝6分 計＝50枚6分	→ 40枚
石参・梅花100斤＝同37枚 荷料＝6分 計＝37枚6分	→ 30枚
長島参100斤＝同28枚 荷料＝6分 計＝28枚6分	→ 14枚

昆布〓七万七、五二一斤余、干藻〓三万七、三九二斤余、琉鱸〓二、一九三斤余、和鱸〓六、一〇〇斤余、海鼠類〓七、四七九斤余、鮑〓一六八斤、帆立貝〓三〇四斤、飛び鳥賊〓一一〇斤、であった（十月十五日）同二十一日条）。合計すると冠船船主・冊封使節一行全体で、一三万一、二六七斤余にのぼる大量の海産物を購入していたことになる。この交渉では冠船側（中国人一行）が今度は購入する側にまわるため、当然低価格で購入しようとしていた。

た。それに対して王府側（評価方）は少しでも価格を引き下げられないように対処していたが、前述のように、その結果は王府側にとって思わしいものではなかった。

おわりに

以上、同治五年（一八六六）における冠船貿易をめぐる、準備過程および交易の交渉過程をいくつかの視角から分析した。冠船受け入れ前の首里王府の薩摩および福州対策のあり方や、評価貿易での断続的かつ一進一退の価格交渉には、冒頭で示したように政治外交の論理が様々な局面で現れていた。しかしながら、旧来の見解ではそのような視点は欠けていたように思われる。そのため、例えば喜舎場一隆氏は、評価物を「琉球国では少しでも高値で購入することに努めていた」とか、あるいは「琉球側の好むと好まざるとに拘らず、渡海人役等が各人各様に所持してきた物をそのまま購入しなければならなかった事情や、また少しでも高値で引き取ることが一種の謝礼と考えていた慣行」とする見解は、少なくとも同治五年の「寅の冠船」には全く当てはまらない。事前の福州交渉などが、それ以前の冊封使渡来時にも展開されていた。それらのことから、**「寅の冠船」**時の評価貿易の交渉形態は、それ以前に遡る可能性は極めて高いと言えよう。本稿で明らかにしてきたように、琉球側は価格交渉において冠船側の交易品に対して価格を抑えようとしており、一方、琉球側からの売却商品には価格を引き下げられないように努力していたのである。

また、冊封使節一行が持ち込む薬種類は、琉球側が通常の進貢貿易時に福州で購入するものとある程度共通している。さらに、冠船側が購入する昆布・海鼠等の海産物は、琉球の進貢船・接貢船・護送船等が福州に持ち込む交

易品とはほぼ同じである。このことは換言すれば、冊封使一行が琉球で行う冠船貿易という交易形態は、福州を那覇という場に置き換えた進貢貿易の一変種であったと言える。

しかしながら、冠船貿易は通常の商業の論理による交易とは異なり、冊封という政治外交の要素と論理が強く作用していた。福州相場を基準とするなど、商業の論理を機軸として王府側は交渉に臨み努力していたが、最終的場面では政治的配慮によって価格を高下させたり、あるいは「加貳」という二割増しの慣例を適応して譲歩するなど、政治外交の論理が優先する複雑な交易形態となっていたのである。その点に冠船貿易の特徴が顕著に現れていると言えよう。

[註]

(1) 喜舎場一隆「近世琉球における受動的貿易」(同『近世薩琉関係史の研究』国書刊行会、一九九三年、「第四章 冠船貿易の実態」として収録。初出一九七二年)。

(2) 徐玉虎「『冠船之時唐人持来品貨物録』之分析」(『第一屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会出版、一九八七年)。

(3) 朱徳蘭「一八三八年與一八六六年の封舟貿易」(『第三屆中琉歴史関係国際学術会議論文集』中琉文化経済協会出版、一九九一年)。

(4) 俞玉儲「三たび清代の中国と琉球の貿易を論ずー冊封の過程で展開する貿易をめぐってー」(『第三回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、一九九六年)。

(5) 孫薇「道光十八年(一八三八)琉球国尚育への冊封実態の一側面」(『法政大学大学院紀要』第三九号、一九九七年)。

(6) 謝必發「琉球『冠船に付評價方日記』的史料价值」(『海交史研究』一九九九年第一期)。

(7) 「冠船ニ付評価方日記」同治三年三月二日条(台湾大学蔵、写本、以下「評価方日記」と略す)。また、本文で日付を括弧で括ったものは、「評価方日記」による。「評価方日記」は、同治五年の冊封時における評価貿易を知る上での基本文書であり、以下の三分冊からなっている。

第一冊「同治三年三月より同四年十二月迄」。

第二冊「同治五年八月十日より同治六年二月迄」。

第三冊「同治五年十二月五日より同治六年二月迄」。

(8) 「評価方日記」道光十八年五月二日条。

(9) 「同右」同治三年八月朔日条。

(10) 「同右」同治三年八月朔日条。

(11) 「同右」同治四年閏五月十六日条。

(12) 「同右」同治四年六月十日条。

(13) スペインドル・洋銀については、百瀬宏「清代に於ける西班牙弗の流通」(『社会経済史学』第六卷第二号、第三号、第三六号)、増井経夫『中国の銀と商人』(研文出版、一九八六年)等、参照。

(14) 「評価方日記」同治四年二月二日条。

(15) 「同右」同治四年七月九日条。

(16) 「陳姓家譜」三世其湘の項(『那覇市史 資料篇第一卷六 家譜資料二』四七一頁、一九八〇年)。

(17) 「勅使御迎大夫真栄里親方日記」(早稲田大学附属図書館蔵)。なお、同日記については、拙稿「『史料紹介』勅使御迎大

夫真栄里親方日記について」（『歴代宝案研究』第三・四合併号、一九九三年）として全文翻刻と簡単な内容紹介を行った。

(18) 「評価方日記」同治三年四月五日条。

(19) 「同右」同治三年四月二五日条。

(20) 「同右」同治三年三月二五日条。

(21) 「同右」同治三年四月二五日条。

(22) 「同右」同治四年三月二八日条。

(23) 例えば、島袋全発『那覇変遷記』中の「冠船前の那覇」項（沖縄タイムス社、三八～四二頁、一九七八年復刊、初出一九三〇年）。

(24) 「冠船付日帳」（『琉球冠船記録 六』慶応二年）。東京大学史料編纂所蔵。

(25) 註（7）「評価方日記」による。

(26) 「同右」同治五年八月十一日条。

(27) 「同右」同治五年八月十四日条、世子尚泰宛冊封使咨文。

(28) 註（26）同。

(29) 註（5）孫論文、参照。

(30) 中国当局が、冊封使節一行による貿易活動を規制していた点については、陳大端（真栄平房昭訳）「清代における琉球国王の冊封」（『九州文化史研究所紀要』第三三号、一九八八年）、および註（5）孫論文、参照。

(31) 「冠船付評価買立帳」（『琉球冠船記録 四』慶応二年）。

(32) 註（1）喜舎場論文、六三八～九頁。

付記

本稿は、以前に発表した拙稿「冠船貿易についての一考察―準備態勢を中心に―」（『第三屆中琉歴史関係国際學術會議論文集』中琉文化經濟協會出版、一九九一年）、「〔史料紹介〕勅使御迎大夫真栄里親方日記について」（『歴代宝案研究』第三・四合併号、一九九三年）の「解題」部分の一部、そして「琉球国における冠船貿易について―同治五年（一八六六）の交渉過程を中心に―」（第六屆中琉歴史関係學術會議時へ一九九六年、於北京への発表、未刊行）をもとに大幅に改稿・増補を加えて、一つの論考に編み直したものである。今後、筆者の冠船貿易に関する見解は本稿によるものとする。